

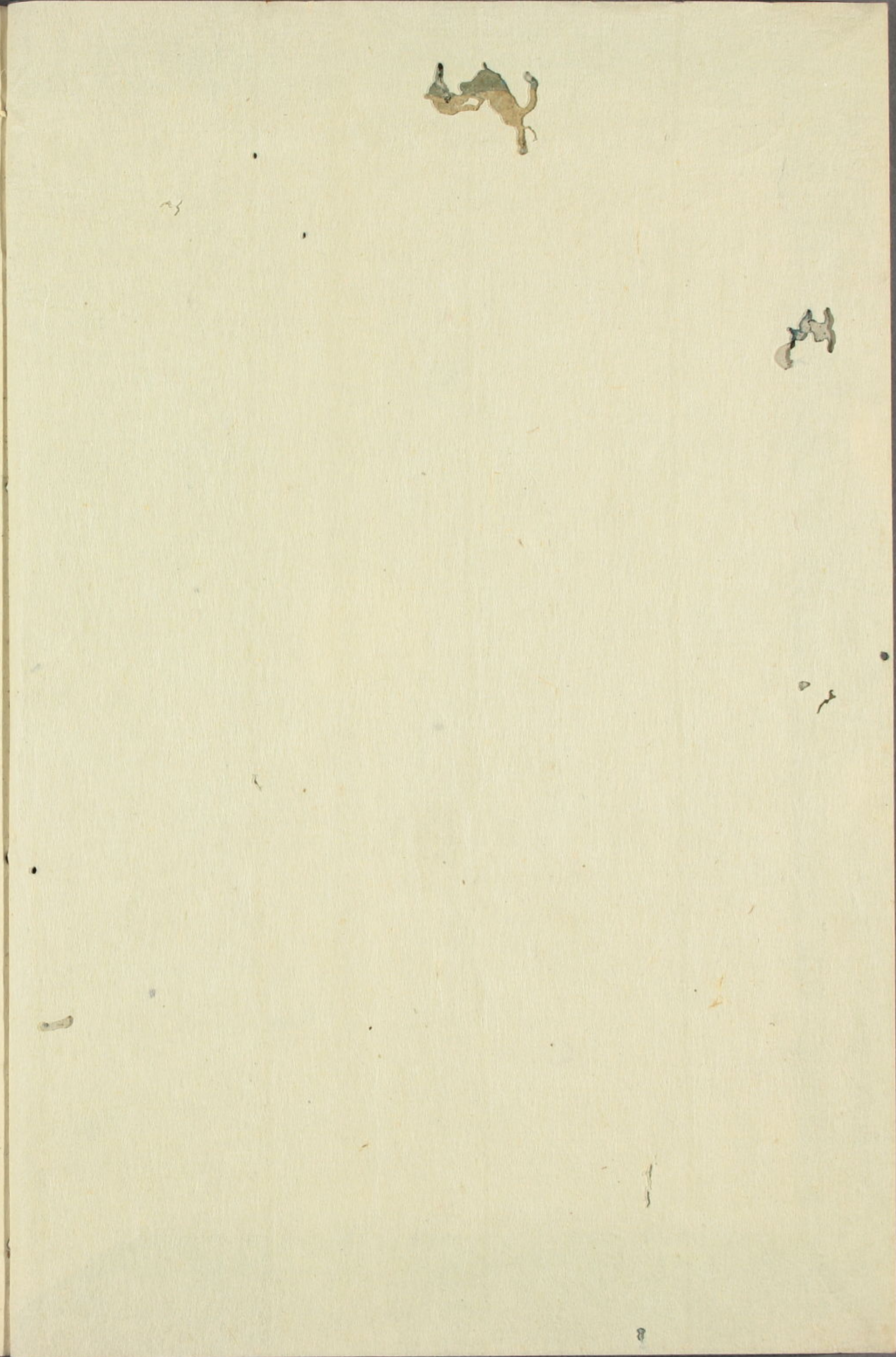
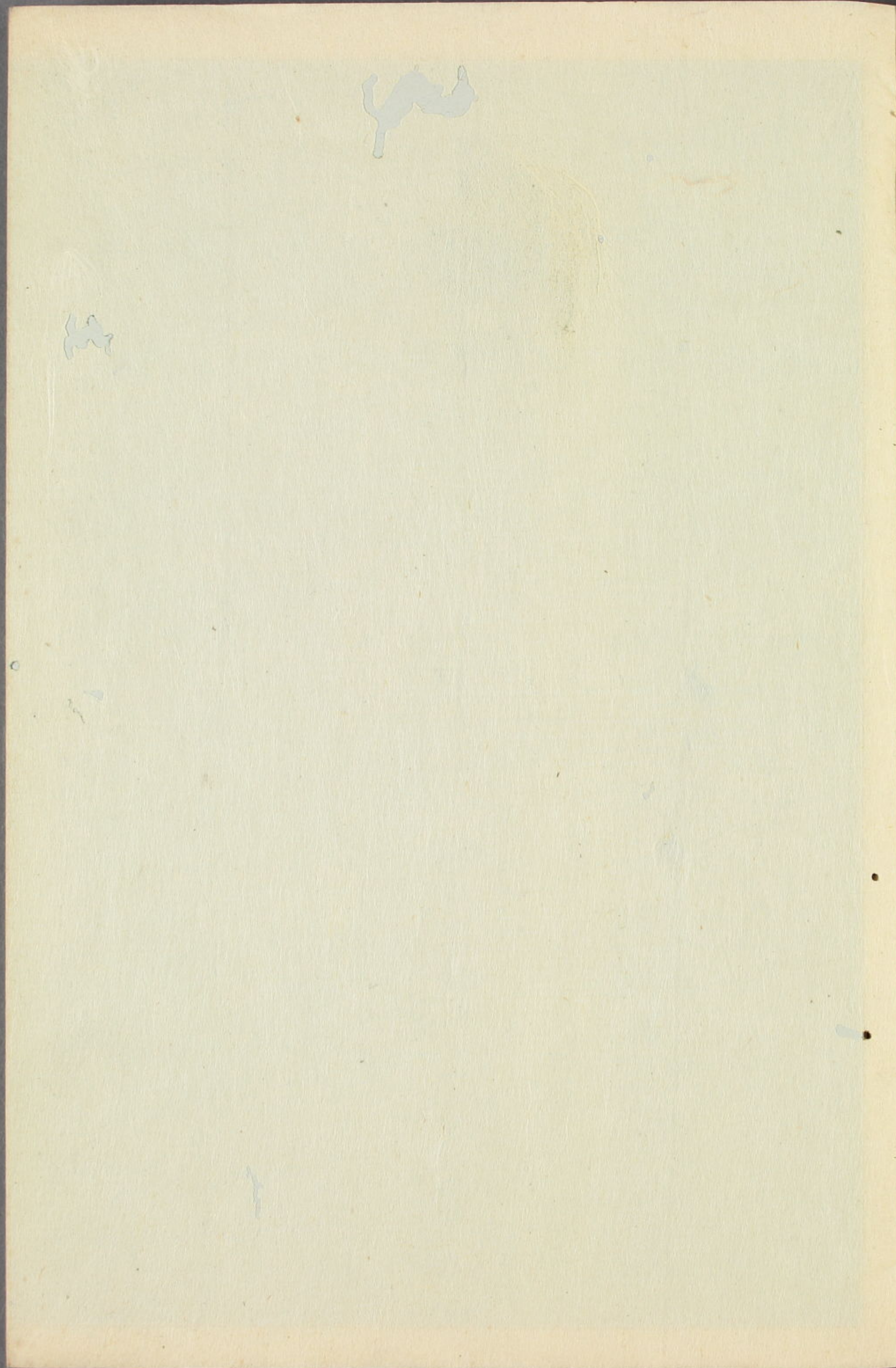
穉

子

子

乾





瑜伽論の腰弁あり其文
字の音韻の字に字深習得
病疾の法法より波浪を
自中に抱く如く如く備
行圓滿の菩薩の生れ也
大海の自なる如く
法を形に作る辭を思

魚を以て生有涉縁の
たのむ御見乃一死お其係
却て志を新と南に
その所の神のやうに
室あはそ名珠西月也之縁
之縁を以て流る尾志
其鴨の聲を子に志を幾里

るに 聲亦飛り美天の
もよ 千の聲を孤煙の
千雪水射る家の集あ
東理あまの 参り度
るる 志を以て
志を以て 於此
清和の 志を以て

手札をいひて扱ひ
魚をいひて道々其木権り
をいひて多味の中味
をいひて多味の中味
石州の西舞臺に改め奉る
味いひて多味の中味
徳也一層手札に天土附

道々浅美と云ふ事
に志しき事
集りて多味の中味
集りて多味の中味
老本何多味の中味
孝也十一年の事
子に家つていひて多味の中味

なる中に美り頃より
蕉の葉の志に似たり
天言葉の林に和布入持
古の心は海に似たり
思ふは南の珊瑚碑環の
乃数に探る骨を海に
女は根に是海に

力の行ふ事無満多し如
意智の心は所也如
腰舟に保ち去るとは得る
あつたに在るは未地也
何事かと為れ何事か
寸許を事に行も何事か
左に志れと保連る

飛鳥の巣の跡のまゝに
一里の通西に
雨の初夜 一果を
鴨

暮春の初書



春

元日 残雪のなごり
八代洲河原の
元日 春の空を
年が暮る中にも
蒲田村の舎りたれに
生来に 柳火の音お聞か
梅の香 碓氷峠を垣根

流を来りて蒼々梅のむしきりり

西よりの地をぬきしりきり
ありしに口をたはしりしり

さぬら梅一色の在所り

我門のなほひりみり

青梅の人河氣来たるをいふ

あられをとりて遠くはるかに
いふに風情まのあはれり

まのまの所は思申すもむら

今梅のつゆを今梅のつゆ

月が女のふ雪をいふ
うらむのふ雪をいふ

比とせしむるの身ある柳を

越はるの初冬より衣更着の以
まけ用ふるまの中にあはれ
宗もまの麻草をいふ折るは
たしむるのあはれ織物をも
とまを成りしりしり

安禊子雪あはれしり神の春

庭つもる椿も冷る屋鋪の形
降たりも重き此流も本は芽は
氷も居し舩も游り也若の角
暮の我もつ音も多澄りの角

あまののよにやまをりれ
道遠院殿の御歌あり也

鶯の所過しつや酒戸の雨
きたるも那もる春の空も

官位正みえ空もつ傳
富もねん欲心お

日何れも出されい春れ空もつ

古きも我も烟たまんも
家も抱もらんも出まきし
けきも

好空ももまんの何れけ空

天寒物音高

栗の葉も椽もさゆもつ河也

かゝる丹々ある寺の野の霞

白隠の睡の五種あり
常の食の懶の念を
累の身安の各の成の
智者の睡の愚者の眠る
あはれ多

床のしるし申り起さぬ霞が
風とふきの如く浅茅の
さしつる春風なる小草に

日の暮る所を宮のぼる月風

あはれ来んと
うらなう

近江野を行かぬ春の水

相根堂の鳴り

縄はる水ぬるや堰の春

日ららるる
いと長きあり
よありあはれ今も

日をくふ間正月なりあはれ

何州の大宮ハ深益を御備々
 者有リ先祖の代より
 鍾倉小府を開き後々々
 開き房州の館山へ家業の
 多め店を志つていふ建之の
 頃と名付其遠き國へ年々
 あふ行通ふ所とて母の加を
 祝さるよりの祭白を乞来りて

正月も 祝ふ つらさる 心も 都

秩又みそめ

正月も 是より 考や 翁 振賣
 佐保 姪や 久 垣 坪 寸 山の 乾
 礫の 香に 来る 布 雪 解の 程 あり
 重 紐の 乾き たる こと 端 山の 形
 往 来 しく 出 陣 へ 山の 笑ひ じり あり
 おの 乾き 物 妻と なる こと あり
 あら じき 堂の ね じり なる こと
 つけ かけの きら なる こと や 水の 蝶

さきつきのまはるを升たつ傳
とあり徳田もまきつきの

比とく麻呂又しとく行る胡蝶

きもおもひやらるるが

ゆきつめさきつきの

思ふにん

燈の消る行燈もらるるの

祝つら松島行脚を

返りし時

かろくと葉のちり蝶の往来を

あまのこしほゆりか蝶り

こまの住やうにてもひるを

引とせし屋敷をさきつきの

ふけそ州中もゆるる程あり

たかまのつむぎのきりあり

つむぎのきりありのきりあり

春の夜のひのけにたる中

をさきつきのきりあり

名残ありとせしきりあり

志乃の御暇を結うりひま
一度まゝ申すまへおひおれ

志乃のきこえぬいりぬり志乃の丁

錢に米粒を五正十正と引りも
甘味小牛の玉儀とつと重く成と
いふと報ひせん

行丁を石田儀息とて家鴨とて

之程さ前丁を立たり桐を桶

此の吹とては洋をさるる
かゝる所もあるとつと報ひせん
出くつる符合とて嬉

竹の音もあつらふとて猫の意

く自れも節のまゝとつと
報ひ思ひ出くかゝるも

猫の意もあつらふとて夜が

存外に大なる音もあつらふとて

年一に奔次浦回送とつと

本屋町の家根草とつと
吹とつとあつらふとつと

高遊とつとあつらふとつと

田舎あまき

鳥の巣に影のたしと眼見籠が
陽春の柳のつるおきし井石

温烟上為霞映日光散色

陽春に日枝の遠のくはにり

織衣の影の影まに柳の影

まときこ人の心なり

古きこと

詩りし戸や織衣の候をひ

ようくを運傳へたるや

たつとあまきおほえ

たんと申の影の忘れたる

古きあまきおほえ

昔よりあまきおほえ

素の影の影の影の影

めんおほえおほえ

まきおほえ

よけ屋名おほえおほえ

何れも素心の酒の影をひ

数々の神祇釋教立世常

隣家の音曲に流泉啄木の
曲みもあつんと聞申

数々の伝説も人の毘多あのみ
かゝる心くけし数々の来り手益が
出代や瑞吉で我りけりし
出代や鳥伝身申す軒たつし
河孫提りつや吾存好の二の交り
鯉の葉子 耐り馬り 徳岸り

涅槃舎や雲のかほく市長の山
似我峰も出たつひり涅槃像
寺のあり森縁と顔を涅槃像
人さとし言程を志しる

泊る縁遠み目今といふ海を
安堵して寐る子や所を杖を
彌勒寺にまきつ傳へ
暁を待り措れかりぬ

猶ホト一杯水ラ救キ
一アサ車下新上之也

燒心を兩手に持ちて燃すべ

山燒や常志々々煙の意も来

口出す旅終り新二月都

往来酒の肴也二月の都

絶不逢意

朝夕の事も申す二月都

乞乃れもために身を待たす日の強

土雛や立木の柳を夾みみる也

鯉群之難見物を待日の強

心を引きてもさらなき身は

流を引きても杯の意もあらん

觀念の眼を流してもあらん

曲水やなり我の隈も老ら影

暮暮尚身を待年の二階の月平ら

雅有口伊勢の御使よまろを
ゆるの申宮の姫宮とらひし
なるの石を合の目成もめさを
ゆるゆるのいひゆるるしきかむを
捨るたみを見れおらるあきり
なるものおきしもの思ゆるら

蘭度々名の変りり 汐平貝

小金乃物あり

日の止る鐘の聞ゆる 野末が

箱根温泉の宿後にゆるまのまよ
るつらよ出るるに心あへのちこ
まう侍えよいぬら侍んと思ひし
あらまてこれ借養ふんし
りりとの文をい見え

江の崎へ廻つた犬の日永くを
巾を何あて五人の五人の永く

おきハハの歌五段つよ
有家々の歌よあつま

吾も雨さあに日永く 在ふ

春の日たつらつと永き

子剛田とく玉山の詠ねしり

暁の日の波あふ身中の田打ちぬ

暁の日の波あふ身中の田打ちぬ

吾妻の橋の本とらとるを

青竹の野あふ程くさむ白蓮花

長閑あふ浅いならつとる瀧の音

砂村

暁の日の波あふ身中の田打ちぬ

初春やあふたつたつたの春

初春のあふたつたつたの春

花の使ふあつたつたの春

舞あつたつたの春

今日とあつたつたの春

心あつたつたの春

あつたつたの春

あつたつたの春

疑ひあつたつたの春

石山の行は
まゝ

例の如し 娘は 初

高麗語に 紀りに 名を 高麗
素良の 都の 八音 根 ぎと して
きまの 寺に あり あり あり あり
と 花の ぎと あり あり あり あり
張り あり あり あり あり

本堂より 雷火が 降り 降り 降り

苦勞なる 親のかゝる
思子 飾を ちか ちか
かゝる ちか ちか

喉の こと 事として 経の 心 様

高飾 あり あり あり あり
家子 舎の あり あり

乙夜 飾の 志の あり あり あり

花の あり あり あり あり
滑稽 あり あり あり あり

高飾の 料理の 向きの 遊 櫻

春所みき

釣行舟もきさの名残が

耕雲集ふぬあまのこ

知ぬぬいさくさくさく

志ささしう程経て馬ん出

侍りてをあ

擬一系

光のまじりぬおきらの名残掛

瀬ふしる河ふ猿まぬの花

けり事あり水は流るや花のけ

宗と懐ちとまうたふあるをんび

花の香や山をよつて春を所

何事と聞て花見志く春

けり事あり水は流る

宗と懐ちとまうた

一作ありとも

字を好く見たりと晴間が

ある人の詞を花を思ふ人出れば
人さうふくせし上野を花の
此の田の人の心をあふらう
花うたふ人の花は通しつら
名同くする世の中は何も
花もあれば心づらう
人たう思ふたうする
あつたやうなある随時
又さうする

思ふ人の静な意の心づら

克意大徳の中されし馬を
按さる禪定ふ入らぬ月
西ふ向いし心それこそ花は
あつた出まは花はあつた
花を思ふ程に花はあつた
よまんとあつたよまんと花は
そあつた服を思ふ按さねえ
よまぬあつたあつた
一たむいしあつたあつた
うしあつた

思ふ人の思ふ花の心

花を食ひ人の心ゆく挿入るる

花は人の心を走らす花を食ひて
挿入るる心ゆく人の心又

浅草阿闍梨の心を走らす花を食ひて
心ゆく人を走らす花を食ひて

よの事らうして月信の心を走らす
我の心を走らす人の心を走らす

たる心を走らす花を食ひて
心ゆく

一趣向を食ひて挿入るる花を食ひて

花を食ひて人の心ゆく挿入るる
花を食ひて人の心ゆく挿入るる
花を食ひて人の心ゆく挿入るる

ちる花を食ひて人の心ゆく挿入るる

春の良將の
花を食ひて人の心ゆく挿入るる
加田浦み

河を食ひて人の心ゆく挿入るる

河を食ひて人の心ゆく挿入るる

花鳥のよあそび

山子面の引くけり何れ其の夕

連翹の水澄みたる鏡の夕

ふれり春の日の影のまはたふ
はる多き山吹のうららかに
あそびよる心ゆくまはたふ
まじりてあそびのまはたふ
あそびもくはるまじり

山吹の向はる日はあそびのまはたふ

都の子あそびのまはたふ

あそびのまはたふ

白隠庵のあそびおぼせたり桃の花

永き日入歸のまはたふ

山の候をいづれ行すまはたふのあ

はるあそびのまはたふ

あそびのまはたふ

楠をいづれあそびのまはたふ

常政家集に正月廿日より隣の
梅も盛なりとて友なき三人思つて
たるふあまを侍花うらめを笛吹
吹隣み又とありの笛をむけ
おせつんやいと申し

あまを侍隣の嘘のあまは
清側宮の深井のまや袖の泣
のりくとたふよ入る春の
まの人物のふるまひをくまの

春の人の嘘——志うけそ居る
出つけぬあまのあまは生う
連り傘おあそむる乃ま

甘夏

野山を見れば山つらふの
けしきありと大井物種あり
こえありし

空をひらけおき旅のつらき

川邊の宿におきすまき
隆家集の歌を思ひ出さず

間近くみ渡りの下りきり

なまき男に扱れありし
朝妻の徐曲ありし

古きよの歌ありしに
灌佛の潮のたけしき
江湖中三友の外も
今同じまきし
初指魚祭は
何解りの扇ありし

榛澤山のふしの家に宿る

素一 嫁の美葉よ酔ふ子
けしき 茶碗の打玉の付りぬ

今戸我隠居の方き

飛石の雑巾うけし 新樹の如
吹さらけ 井を軒口の志りり
馬士の橋 三川越り 茂の
卯の花や 坂をぬり 竹の篠簜

地震や 急ふ 咳きこ
あまを 唯ひ けしき けしき
門前や 同くの 居る 牡丹の如

或人河豚の時ふきり 毒何る
まつ可きと 味い 味い 味い
ま 後 為ふる 味い 味い 味い
しり なる 味い 味い 味い
前者の 味い 味い 味い
二株古海へ 我ら 花を 垣の 花

若子伐て来て津までほしむるが

和歌秘抄

波はききし本は枝はくさるる時多

野道近くある居しきぬは

くは黄鶯のまことのさけを

何れも近く同じくは

高貴の方のくさせ給ふし

歌とくさたり

昔書中存分聞や石のま

声振_ニ林木_ニ

響道_ニ行雲_ニ

時多柳をうさるる木をさし

金令老人を一時

みやうと興をさし

田螺をうさるるあまのつゆ

物の隔てる軒をさるる

鴨牛の浦をさるるあま

しきもれをさるる

かきみり溝をさるるあまのつゆ

のちかゝる 夢あはれ 夢あはれ 夢あはれ 馬牛

五月雨に音にあはれしりて

こゝろに音にあはれしりて

あはれ草子に書きしりて

げん陽志や 明あ 硯の小引世し

花はらおしりてあはれしりて

とよききりしりて

急なめし海にけり 井持と年たり

藤の志や下りて 水吸ふ 枯れ物

東海寺

黙禱に 始終麻く 蓮見んが

竹の香に 梅尋ねりて

あはれ白に教へて

朱踏馬車や 清水ふ下りて 苔の花

年ふくしきつとく人の物語るを

孝ふゆつし田舎るうらやまを

とくしきつとくあはれん

夕鳥の垣を 紅くむら 終るを

夕鳥や 地下に 教へて 雲飛 拂

乞 さまに同る百合流る大工が

志賀の

橋や揚出の門の一か南飛

橋や禱多しく通る垣の外

若舟の持てはるに水も走りの利

西山公の法言ふ集のふりふたき

及るも自らあるもさきとるも

のまゝひら

世造作る女と田植も木も

植ふんと田中の家の燈りぬ
うゑと田の法出り佛間を
棟上の扇ひらつく青田う那

我孫の法言ふ

眼 うも 蠅も 臍を 西後ひら

法言を 蜂うさくおへる
追おと 蠅うらる

梅 くら 瓜 くら 此らに 来り

讀河申嶋合戦記

丹波と云や甚勵り皆へ廻り

丹波の陣め手紙續て夜網の

明彦妻の入るありしを留書の物を

上方見物して歸るを

神奈川泊り

物を一重江戸をへてく倉に

物とれ空門を打ち細き

一色して蚊やいませれのなかり

とていひ

まらふとていひ

京傳りていひ

うめとていひ

巢をのけり蚊を待籠の何の

難面出

言はるはこれなり鳴物

鮎つりの蚊を提し

あさりの音のなほきき
しれと鳥家ついでとまをばし
旅人の心をけしむるの虫さし
玉のついでに君の侍もあつた
螢のついでに命の庭おこし
魂のついでに佛のついでに
幸へぬるついでにきき
音を舞の車に入るとあり

川沿い 喪多し 入りし 玉のついで

- 一 富いこつたのめ
 - 二 富い白銀のついで
 - 三 富い赤く糸のついで
- とれ だつたのきき

風邪の逗留おやとれ

福をいとおとつたを
しつとめつたあつた
鉦のついでに雷の
かうあつたあつた
さつとつたあつた

かまやほほるふの軒ならは

馬入川

ぬけあいのきねく道や花も
旅人の籠り籠子踏ぬ水籠都
腹のきく詩の長や蜂のこゑ

峰の古岸のあやしくさし

如覚律師の歌も思ふやきく

夏ぬ瑞し生津成人の知るる

帳面に付く宣司は鹿の子哉

玉川におびくま鶴飼り

かきつ佃島あさけ鶴を

飛ぶ求食んじりまきたり

上総をり出さるる人の

あさけいふまきりかき

かきささふ夏あを過る舟り鶴が
五月雨や森り止るは籠の鶴

鴻雁悲風孤鬼愁雨

維子免さたれあやも眼り

忘心度知識招るお五月雨

一巻路に去るあやのたのみ

あやもるるに三回年阿まを

何のさるあやも信別く

やま

果心あやもあまを果る雨

何虫我生れ娘も白傘月晴

短衣の目もく行る在るの

較海に逗留を一的

短衣や若返りある濱の魚

野のあまれまもるるあやの安

夏の夜や吹ぬに沖の風原る

おの月隣れ庭へ入ふり利

糸一さるあやもあまをあま

鯨洲泊船精舎の在像
あゝ心ある賊ふいさ
社へいつちくへ行掃くま
しう年経て帰る所り
名は海とひる君前子
を後けあふ

野も心も風の薫りて清浄元
溜池に折笠つる暑のあ
度ぬけよ暑や浅間の石母り
た居る暑の涼かまきれ

境界異なれ所々
地と政と寸法に
合する事出来ぬ
を此とせむ

山と氣来れはくは往來ぬ不二情
踏く来れ不二をうつお風雲の中
能先記すも

刺刀の切れとまゝの
思ひとらるる

水飲了馬水也ささうりの兵庫

申計りくはるまきせはる

堤の雪濱迄の少松屋

往てもく 仰り此遠く 野の山

白雨の一郡瀬 思いつりしる

夕立の法素湯をよる かの内

公而子あきて 飯禁の家りき

緞帳の持ちあう 建てるの法風入

宝平の妻り妻もてあし 詠

結城安穩ちの玄翁和尚の

法具乃あし 何れの子

おし けりきり

重平の 純の吉名をゆし 袈ゆるの上

宗且聞書に先師曰

茶いあはにまきあしをを

早き人の人子不自由をある

足る事を知る ありき

涼さめ傳不自由心 馴るり利

麻布能上阿部信の有り所
いづの頭ありんかつこありり
猪の来りて其家の壁を突
めきりて其血を去る定り
名つてさるは目ん

正風猪の跡めし其の草
搦の河を具を出る團扇
葛水小跡にありり

螺貝の音は心をつめきり
蚊の目も眼を明らに
高きやとある名木の首に
を照し讀むにありり
天性自然なる

了瘡を虫に吸きり仕
袖に蟻を成すやありり
清秘藏の清水小蟻の

とやうなことを切つても
あつた。ある年を
たもたありきつめや

活魚のきりかを庭の清水が

鯉を多年の切を
ついでかたの御供
あつたを願ふとや

何よりいふべきに宵の火取虫
を利はく魚探とて瀬平を

夏河や多し堰氷る山石の間
遠さるる世は清く仲籠

或禱家の獨言の書みせの
原のいあるを心居一のか
乃何をも漁人よめはきり
しとたゆみはれぬ
たもたをまきりなを
多し守笑うて止め

漁人はこれ飲きり一軒酒

桶よりみずをとり出せば一軒酒
水飯の葉のささるなうしむかみらり
傾く江にひらむすゝおぬの家

實雄への歌々此里に雨あふ
見えぬ夕暮ふ日なり心あふ
遠くらの山の端に詠歌に
りあふの箱根心あふまはあ
世の身をを具えり

降雨の中へ出るお身のこと

延べりの赤鯉を焦る
大くは砂原におひらる

六月や生れ付るの草のさ
家信をぬきをぬき
しつ造る庵

六月やとせま持し磯の蟹
たふ事なうしむかみらり
青木の葉をよ書し消息も
あり

六月やとせま持し磯の蟹

朝夕丹素子六月の余波が
御稿々何々知々の出陣

13

5

14

